

飯盒の遺書

——ソロモンに父を尋ねて——

皇学館大学助教授(小樽川野) 所 功

父に会ひたい、自分の父の、戦地から送つては、一体どんなところで、きた唯一の葉書には、次のやうに戦死したのか、ぜひ自分で確かめてきたいと思ふやうになつたのは、中学校二年生の時である。

大日本帝国 岐阜県揖斐郡 小島村字野中 所かなをへ 南海派遣軍沼八九二五 部隊 狩野隊 所 久雄

「お父ちゃん」はな、大きな体の丈夫な人やった。本当に正直な働き者やったよ。お父ちゃんは、功が生れて半年目に出征されたから、何も覚えずとらん管なのに、毎晩「お父ちゃん、お父ちゃん」とつぶし、私も或晩お父ちゃんが急に帰つてきた夢をみた。戦死の公報が入つたのは、それから半年も後やけど、あれは確かに昭和十八年七月二十七日ころやった。お父ちゃんは今命がけで御奉公して、死ぬとすぐウチへ帰ってきたんや。功も、お父ちゃんに恥かしくないやう頑張りいよ。」

戦地からの葉書

母はこんなことを話して父の形見をみせてくれた。



陸軍兵長 所 久雄

母の形見をみせてくれたもう一つの形見は、赤茶けた一枚の戦死公報であった。 陸軍兵長 所 久雄 右、昭和十八年七月二十七日

日ソロモン諸島ニューギニア島ムンダノ戦闘ニ於テ、腹部砲弾破片創ヲ受テ戦死セラレ候。……」

地図に見えぬ島

これを見て、私は最早中学生用の世界地図を開いた。しかし赤道直下ニューギニアの東部島が点在しその上に「ソロモン群島」とは書かれてゐても、それがニューギニア島なのか、全然わからない。やむなく学校へ行き宿直の先生に調べてもらったが、結局見あたらない。

その翌日初めて靖国神社へ参拝した。私は一生懸命お祈りし乍ら、父の面影を探し求めたが、何も思ひ浮かばない。その代り昨夜みた地図の島々が目に浮かび心秘かに誓つた。——ヨシ大きくなつたらお父ちゃんの時節柄、体を大切に立派に功を育ててくれ。以上

この葉書は、そのとき写しを作り、以後肌身はなさず持つてゐる。

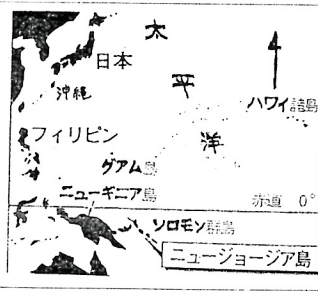
待ち続ける英霊たち それから十数年、折々に父を想ひ、南海への夢を抱き続けた。しかし所詮スネかじりの時は実現できず、大学院を終へて皇学館大学に奉職した昭和四十二年の夏休みに、一歩でも南の島へ近づきたいと考へて、沖繩の戦跡巡拝に出かけたこともある。

その沖繩巡拝から、五年も経過して、今年私は父と同じ満三十歳になつた。ヨシ今年こそは実行に移さう、と心に決めたのはこの元旦である。

そして、この決心を決定的ならしめたものは、正月下旬、グアム島で二十八年ぶりに発見された横井庄一さんの述懐である。横井さんは、三十年近くもジャングルに隠れてジツと生き長らへた心境を、

「自分は天皇陛下さまと母親を心の支へに生きて参りました。そしていつかは日本軍が助けに来てくれるものと信じてゐました。」と告白された由。これを伝へ聞いて、私はハッとして忠孝の至情を支へ、友軍の再来を信じて、今まで待ち続けてゐたのであらう。とすれば、既に戦死せられた英霊たちも、忠孝の至情に殉ぜられた上は、同胞の再来を待ち続けて居られるのではないか。自分の遺骨を拾つてくれる日本人が、やがて必ず来てくれることを信じて死地に就かれ、今や遅しと待つて居られるに違ひない。

地へ行ってその風俗を研究して来た「ソロモン探査記」の著者、足立英雄氏(名古屋在住)、いま一人は少し遅れて現地へ渡り、三年前に酋長の孫娘と結婚してゐる佐藤行雄氏(ギン島在住)である。共に三十五歳前後の快男児。足立氏は有能な現地人あてに紹介状を書き下さう、ミスター佐藤からは「安心して来るやうに」との電報を頂いた。(日本→ソロモン三千海里)



準備の第一は、現地の実情を知ることであつたが、幸ひ良い人と連絡がとれた。一人は、十数年前に現

準備の第二は、遺骨収集の可能性を確かめることであつた。この点も幸ひ昨年十月、中部ソロモンへ遺骨収集に行かれたラパウル会の人々に会ふことができ、特に東京では今井秋次郎氏と山田栄三氏から、また地元では、大音龍尾氏(刈谷)と真瀬真一氏(浜松)から詳しい事情を聞くことができた。以上四氏の話では、ニューギニア島も可能なかぎり収骨してきたので今年個人で行つても収骨は不可能かもしれない、との戦死されてゐる。そのうち

遺族の記載されてゐる三百数十戸あてに葉書を出した結果、半数以上が受取人不明(死亡か転居か)で返送されてきた。しかし、百名近い方々からは応答があり家族の写真や寄せ書きとか故人の好物等を託された。準備の第五は、現地に建てる慰霊碑を用意することであつた。まづ伊勢神宮で御用材の松を一本頂戴し、恩師の平泉澄博士にお願ひして「忠魂」と書いて頂いた。英霊を真に慰める言葉は「忠魂」以外にないと思ふが故である。そのさい島にまして 幾年月ぞ今こそは 吾子の迎へに 帰りませ御魂 との御歌を賜はつたことはまことに嬉しい。「忠魂」の側面には「大東亜戦争中此地ソロモンにて散華せる日本の英霊に捧ぐ」と自分で書き添へた。しかし現地は今もイギリス保護領で英文の説明板も必要と思ひ、合成樹脂のプレートも作った。その文面は左の通り。

ENOTARI OF JAPANESE BRAVE MEN IN WORLD WAR II

準備の第六は、渡航手続である。これも幸ひなことには、ソロモン会の戦友がブーゲンビル島へ慰霊巡拝に行かれることを知り、途中で同行させて頂くことにした。しかし、主目的の

ニュージョージア島へはとんど見あたらない。やはり一人旅になることを覚悟してゐたところ、出発の一週間前になって、前述の葉書を受け取った遺児の一人・説田好重機君(二十九歳、大垣市南瀬町在住)がぜひ一緒にいきたいと申し出られた。見るからに元気な青年である。即座に意気投合して、強引に渡航手続を進め、出発前夜にピザをもらった。

灼熱のソロモン

かくて七月二十二日午後東京集合。靖国神社に参り旅の平安を祈った後、九段会館で壮行会が催された。その席上、ソロモン戦を指揮された神谷参謀より激励の言葉をかけられた。

翌二十三日正午、羽田より初めて飛行機に乗り込み四時すぎ香港着。夜半カンタスに乗り換へ、フィリピン上空を通過して一路南下。翌二十四日早朝、赤道あたりで眼下に日の出を見、まもなくニューギニア島のポートモレスビー着。さすがに南国の直射日光は強烈である。

やがてTAAのプロペラ機に乗り、真東のガダルカナルへ向かった。途中左下にソロモン群島を見ながら、余りにも沢山の島々が帯状に連なっている姿に驚いた。どの島も密林に覆はれて、人家らしいものはほ

美しい平和の楽園

さて二十四日午後二十時、五日は、ソロモン会の人々と車でガダルカナル(略称)の激戦場を巡拝。どこも今は平和そのものであるが、説田君の父上(海軍航空兵)が戦死されてゐる島にて、バギアで厳肅な慰霊祭をした。その沖に残骸をさらしてゐる輸送船九州丸の姿は何とも痛ましい。

翌二十六日朝、愈々待望のニュージョージア島(略称)へ向かふ。ソロモン会の人々は隣のブーゲンビル島へ直行したので、以後は説田君と二人きりになる。しかし二島のムンダ飛行場にはギゾ島の佐藤行雄氏が、大勢の現地人と共に出迎へて下さり、ホッとした。



(池の前で作戦会議?)

この二島は、中学生用の地図に名前すら見へぬが、いま現地に立って眺めると実に大きな深い密林の島である。その西には丸い高い山の聳えるコロンバンガラ

島、南には見事な椰子林のレンドバ島がハッキリ見える。空も海も碧く澄み渡り浜辺に咲いた真赤なハイビスカスや真白のフレンチ・ペニーを引き立ててゐる。何と美しい静かな島であらうか。地上に平和の楽園があるとすれば、この島こそその名に値しよう。

この感を一層深くしたのは、現地人の心に触れてからである。出迎への人も、宿所のメイドさんも、我々を見るなり、「オムジャパニーズ・ナンバーワン」と話しかけ、自分たちの出来事は何でもするからと申し出てくれた。それが決して場当りの御世辞でないことは、丸三日半のムンダ滞在中に彼等が立証した。

とはいへ、彼等が何故かうも我々に親切を尽くしてくれるのか、よく考へてみると二つの理由があった。一つは戦時中、日本の兵隊さん達が、現地で無茶をせず、むしろ善人が多かったからであらう。現に四十歳位の現地人は、そんな話をしてから、楽しさうに太平洋行進曲を歌ってくれた。

いま一つは、何といつても佐藤氏が十年來ソロモンの発展のために力を尽くし、現地の骨となる覚悟であるからであらう。現地人は若し佐藤氏を尊敬し、慈父のごとく慕つてゐる。

遺品ミツケタ!

二十六日昼食後、今日は一応場所の見当でもつけばと思ひ、住民の部落を通つて旧称「清水台」へ向かふ。道順は、戦友の長縄さんに書いて貰つた地図に順ひ、まづ飛行場から四キロ東方の海岸に瓢箪形の池を発見。そこから北に折れてジャングルの中に大きな自然壕を確認。ついで更に約半キロ小高い丘へ登つてゆく



(飯盒のフタを読む!)

と、まさしく清水台の十二中隊陣地跡と思はれるクボミに辿り着いた。

成程ここが例の陣地か。聞いてきた通り向側の米軍陣地は、戦前からの密林に覆はれてゐるが、こちら側は迫撃砲と爆弾の雨がハゲ山になつたらしく、雑木も若いなあ、等と感慨に耽りながら、そこに暫く佇んでみた。すると五メートル程横の方にゐた住民の一人が「サトノカムヒヤ」と叫んだ。驚いて見ると、倒木の根元に、弾痕の痛々しい水

筒や飯盒、真二つに割れた鉄兜、錆付いた三八式歩兵銃等が散乱してゐる。それは陣地を出て数歩も行かぬうちに敵弾の直撃を受けたであらう勇士の最期を想像させた。

その時である。「所さんこれ『戸』と読めませんか? いや確かにさうですよ!」と、興奮した面持で佐藤氏が言った。まさか、とは思ったが、手渡された飯盒の内蓋をみると、佐藤氏が木の枝で擦つてくれた部分に、ある! 確かに「戸」と刻まれてゐる。そのみではない。よくみると右隣も「戸」と読めるではないか。これは戦地からの葉書などで見覚えのある父の筆跡に間違ひない。

「戸」——見れば見る程父の刻んだ文字に違ひない、これこそ正に父の遺書だとの確信を深めた。そのことを佐藤氏や説田君に説明しようとしたが、もう声にならない。思はず地に臥して「ありがたう! うれしい! お父さん、お父さん」と泣き叫ぶほかなかった。

父の遺品が見つかったのである。ただ父の戦死地に行きさへすれば、と念じて来たのに、ムンダへ着いたその日の、しかも陣地跡に立つて五分もしないうちに父の遺品を手にとれるとは何と幸せなことであらう。

これは奇跡か、さうではあるまい。父の霊は確かに私の迎へを三十年間待つてゐてくれたのだ。このことは一刻も早く母に知らせねばと思ひ、約五キロの道を一目散に走つた。ブラック同然の飛行場内にある簡易無線室へ駆け込んだ頃には頭が朦朧として、仲々文案が書けない。名前を刻んだ飯盒を抱いて居りながら、打った電文は「オトウサンノスイトウミツケタ!」——慌てぶりを笑ひ給ふ勿れ。

忠魂は朽ちず

翌二十七日朝八時、約束どほり来てくれた住民数名の協力をえて、昨日遺品のみつかった倒木の根元を、注意深く探した。すると何センチも土を除かぬうちに、まづ片脚の骨、ついで大腿骨の一部が出て来た。土に化する寸前のポロポロ



(英霊に酒を注ぐ)

骨ではあるが、これ正しく父の遺骨であらう。さうにちがひない。砲弾の破片や銃弾なども出てきた。奇しき縁である。その日は父の命日。腹部砲弾破片創で天晴れた戦死をとげた父の遺骨は、子である私に

拾はれることを、三十年間待ち続けてゐたのであらう。よくぞ朽ち果てず待つてゐてくれたと思ふ。さうだ、父は決して朽ちてゐない。骨は大部分土に化しても、み固に捧げた父の「忠魂」は断じて朽ちる筈がない。父は、そのことを教へるために、私をこころへ招いてくれたのであらう。肉眼に見えざる霊魂の尊厳を、更めて確信した。

同日午後、遺骨の出た地点を深く掘つて、遺族から預かつた品々を埋め、その上に祖国日本の方へ向けて「忠魂」の標を建てた。左隣には英文のプレートも。それが終ると、住民たちが周囲に柵をしてくれた。これはハイビスカスの挿木で来年は見事な花を咲かせるといふ。何と麗しく優しい真心であらう。

慰霊祭は神式と仏式で厳粛に行なつた。我々に倣つて住民たちも日本式に礼拝する。とくに地主のマロニは、私の手を強く握りしめ「後の事は心配するな。僕が毎月二十七日に来て草を取り、兵隊さんに水をやるよ。」と約束してくれた。遺族として日本人として、こんな嬉しいことはない。

「原文のまま、詳細は『日本』十月号続稿)